

わたしの青春譜

北野 典爾

予科1-6 航空4-1

(熊本県荒尾市)

昭和の初めに生を受けたわたしにとって、小学一年生入学時の国定教科書「ヨミカタ」(現在の国語)の先ず一ページに目を通したのが「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」「ススメススめ、ヘイタイススめ」の片仮名の字であったことが、七十余年を経過した今でも頭の中に残っております。私の一年以上先輩の方々は「ハト、マメ、カラカサ」の文字から始まったと聞かされておりました。

父母が明治の生まれであり、二人とも小学校の教師をしていた関係からだと思いますが、乃木大将を頗る尊敬しておりました。わたしが生まれた数日後、父が勤務先の小学校にて講師の方から乃木大将の話を聞いて、非常に感動し、乃木大将にあやかって命名し、即ち、「典爾」の典は乃木希典の典を、「爾」は日露戦争の激戦地の爾靈山にれいさん(二百三高地)の爾を頂いたのだと、後で父から聞いて驚いた支第です。この様なことからわたしを軍人に育てたいという両親の願いがあったのではないかと思いました。

小学校での初めての先生や、会う人ごとに違った呼び方の名前を言われたために、読みにくい名前で迷惑だと思ったり、逆に感謝したりなど、複雑な気持ちになったことも否めない思い出の一つです。

小学校六年間は戦時中でしたが、子どもにとっては新聞やラジオで日本軍の活躍を

聞いて華やかな感じを受けた時代でもありました。満洲事変、続いて支那事変(日中戦争)が勃発して、軍人の任期を終えて帰郷した若い青年や壮年層にも、招集令状(当時は赤紙と言っていた)が役場の兵事係から当事者に届けられる時代でありました。

満洲や支那に出発される朝には、地元の神社の境内で必勝祈願祭が開催され、部落の方々は勿論、校長先生および担任の先生の引率で私たち五年・六年の児童数十名も参加したものです。

戦争が激化するに伴い戦死者が出ましたが、約二キロの県道の途中まで遺骨をお出迎えに歩いて行ったこともありました。新聞もラジオも、日本軍のすばらしい戦果がその都度報じられ、特に私達小学生の頭に残っているのは、南京入場での松井石根陸軍大将の馬上の勇姿を新聞で見たことで、俺もこの様な姿で軍人になりたいと思いました。

時々遠くの映画館に歩いて行きましたが、最初のニュース映画を見たあと、戦争に関係したドラマが上映され、私達軍国少年達は嬉しさのあまり、万歳万歳と叫びながら帰宅しました。

小学校六年を卒業して、熊本県立の中学校(現在の県立高校)に進みましたが、二級上の五年迄の先輩からは、朝夕顔を合わせた際には敬礼せよとの指導がありましたので、校章をつけた黒帽子を頭に乘せて、所謂軍隊式の拳手の礼を毎日実施したものです。

中学三年生の期末考査(試験)を受けていた二日目の早朝、家のラジオで大東亜戦争の幕開けを聞き、いよいよ本格的な戦争が始まったのだなと感じました。

開戦直後の真珠湾攻撃、更には軍神とされた岩佐直治大尉以下九名の方々の特殊潜航艇の活躍などを聞き、その成果に躍起となって喜ぶと同時に、更なる気概が益々

沸いた次第であります。

十歳違いの妹が亡くなってから丁度三年目に当たる昭和十八年の夏頃に、日頃より希望していた陸軍予科士官学校（現在の防衛大学に相当）の身体検査が熊本の偕行社（現在のNHK）で、また学術テストは市内の旧制中学校で開催されました。私達十数名は以前の京町の加藤神社横の染谷旅館に宿泊して試験を受けました。そして、合格発表の十一月三日（当時は四大節の一つ明治節、今は文化の日）を待っておりました。その日は祭日でしたが学校に登校しておりましたところ、担任から呼び出しがあり、わたしの合格の連絡がありました。急いで帰宅して、東京の教育総幹部からわたし宛に「リクシニゴウカク、スグヘン」を手にして、夢ではないかと喜んだことを今でも覚えております。

その後「昭和十九年二月二十四日二着校セヨ」との通知がありましたので、中学校の卒業式を一ヶ月後に控えながら、父に伴われて急行夜行列車で丸々二十四時間の旅を経て翌日の夕方東京駅に着きました。二月の寒い夜でしたが二人で泊まった旅館（ホテルはなかった）には火鉢も炭すらなく、折角母が作ってくれた堅い餅も焼くことができませんでした。翌日、埼玉県北足立郡朝霞町（現朝霞市）の陸軍予科士官学校の門に入りましたが、この時こそが私の軍人生活の第一歩であると思いました。

身体検査なども無事に終わり、二階建ての兵舎の部屋で学生服から初めて規定の軍服に着替えた時は、これで本当の軍人になったという誇りと嬉しさで胸一杯になり、その夜両親に葉書を送りました。

一日の生活は、午前中学科、午後は術科、夜は二階の自習室での予習復習、就寝は藁布団の寝台というパターンで過ごしておりました。

ある時は学校内の小さい池に腰までつか

りながら小銃を両手にあげての海中作戦の訓練を始め、体操、剣道、銃剣術、そして実戦さながらの戦闘訓練などもあって、若い私達にしては一日中暇のない一年間でした。夕食は広い食堂まで区隊四十名が四列縦隊を組んで軍歌「万葉の櫻か襟の色」の歩兵の歌を歌いながら往復したものでした。

八月上旬、沼津市の小学校の体育館に一週間滞在して沼津の海で遊泳演習が行われましたが、隣の中隊の一人が遊泳中に溺死したのを聞き驚いたことでした。

遊泳演習が終わると、入校後初めての帰省が許されましたので、半年ぶりに我が家や庭の草木の緑を見て、一週間の休暇も一瞬のうちに過ぎましたが、これが最後の帰省ではないかと思いましたので、八月の暑い中にも拘わらず約四キロ離れたカメラ店に、短剣を腰に、そして皮の長靴をはいて写真をとったこともよい思い出として残っております。



帰省時撮影（十八歳）
陸軍予科士官学校・昭和十九年八月

予科士官学校の生活概要の結びとして私の最も印象に残っているのは、私の中隊約二百名を集めて、中隊長の光森勇雄中佐（陸士38期生、四十二歳）が「陸軍士官学校とは、死ぬことを教える学校である」と力強く言われた言葉であります。この様なことは、今の世の中では到底考えられないと

と思いますが、当時の私達にとっては、貴重な有り難い教訓として心の底まで染みこんでいたのを今更思い出しております。

昭和二十年正月の帰省を期待しておりましたが、国内の輸送事情や、戦局急のため学校で新年を迎えました。

戦局の悪化は急速に進み、三月十日の東京大空襲は約十キロ離れた東京の朝霞町の予科士官学校（現在の陸上自衛隊朝霞駐屯地）の兵舎の前庭に集合して一晩中赤々と燃えている有様を拳を握りしめながら眺めておりました。また、迎え撃つ日本の戦闘機が交戦中被弾して学校の練兵場に落下する光景を見て切齒扼腕したこともあります。

四月になると、敵機の来襲は学校にも及び、ある中隊の区隊長と同期生数名がB29の爆撃を受けて亡くなったこともあり、戦局が益々急を告げていることが痛感させられました。

一方、二月頃兵科（歩兵、砲兵、工兵、航空兵）などの希望調査がありましたが、私は当時の戦局から「航空兵」（新老人の会の林田満雄君は迫撃砲）を希望しましたので、三月の卒業式に出席して、直ちに埼玉豊岡町の陸軍航空士官学校本科に入校し、航空士官候補生として猛訓練を受けることになりました。



陸軍航空士官学校・昭和二十年五月
(十九歳)

しかし、七月になると米国の艦載機の空襲は豊岡の航空士官学校に迄及び、兵舎の前の地面に伏せていた私達の頭上に急降下してきた米の戦闘機P51の射撃をうけ、同期生の左足に命中し大怪我をしたこともありました。

やがて、ソ連の参戦に加え、広島・長崎への原爆の投下となり、両市民が嘗てない痛手を受けて八月十五日を迎えました。正午に候補生全員が講堂に集まり、校長の陸軍中将徳川好敏閣下（この方は我が国最初に陸軍の飛行機に乗った人だと戦後のNHKテレビドラマで知りました）以下将校と私達が陛下の玉音放送が聞きとれないあと、校長の訓辞の中でやっと敗戦を知り承諾必勤の意味が判明した支第です。

そして三日目の八月十九日、ある中隊の区隊長上原重太郎大尉（55期）が校内の雄健神社の境内で割腹自決されたことを知り敗戦の悔しさと涙で一杯でした。

復員列車に乗車したのは八月下旬の朝でしたが、鈍行列車で大阪駅で乗り継ぎ、翌朝九州入りをしました。筑後川まで来た時鉄橋がB29の爆撃で不通になっていたため、歩いて鉄橋を渡り、待っていた列車に乗り換えてやっと自宅に帰り着いたのも思い出の一つでした。

暫く心の空虚な時もありましたが、今後の身のふり方なり、生き方などを考え、再進学を目指して熊本県の大学高専を受験すべく勉強をしておりました。ところが二十一年になってGHQから、旧軍関係学校に在学していた受験生は合格者の一割に止めるとの話を聞きましたので、県内の受験を諦め、水戸市の高等農事講習所で再教育を受けた後、昭和26年4月から当時の熊本経済連（JA熊本経済連）に就職しました。敗戦後の日本の復興は「農業にある」との

強い信念を持っていたからでございます。

当時は交通事情も悪く通勤も不可能でしたので、福岡県香椎町（現福岡市）で二人の子どもを育てておられる戦争未亡人（ご主人は香椎宮の神官をしておられて召集令状にて南方で戦死）の家に下宿をお願いし、家族の一員として食事と一緒にさせて頂いたことを、今は亡き“香椎のおばさん”に心から感謝をしております。

香椎居候中、おばさんに差し上げた、私の拙い短歌、ご笑覧を：

たたかい
戦争に大いなる痛手を受けし人
あした
明日も強く忘れ形見と生きよ

J A熊本経済連には昭和61年までの35年間勤め、参事を最後に定年退職しました。退職後は1年半、地元の農協長を勤めていましたが、任期の途中、自民党熊本本連より荒尾市長出馬の要請があり、昭和62年から平成15年迄4期16年間、荒尾市長として約6万の市民と共に石炭の町の市長として微力を尽くしてまいりました。

平成20年の秋の叙勲では旭日小綬賞を賜り、受章者及び配偶者400名を代表して、皇居の豊明殿にて天皇陛下の御前2メートルの場所で、お礼の言葉をマイクを使わずに申し上げることが出来ましたことは誠に光栄の極みであります。



H22年叙勲の際宮中での記念写真

現在の日本は東洋ではトップの国として自他共に認識されていると思っておりますが、中国、韓国、北朝鮮など近隣諸国との関係も見逃すことはできません。今日の暮らしよい、戦争のない日本になり得たのも、太平洋戦争で尊い命を捧げた方々がおられたらこそで、この方々に対する感謝の気持ちを忘れることなく、今後の世界の状況と日本の現状を見極めながら国のため、そして地元荒尾市のために精一杯努力したいと考えております。（注：新聞「叙勲」H27年新春特別号及びH26年8月15日号より一部訂正の上抜粋）